

生涯学習としての「ジェロントロジー教育」（加齢・老齢学）の基礎調査・研究と普及方法に対する考察  
シニアの能力を活用するための生涯学習コンテンツの開発

## 高齢者を社会に活かすためには、高齢者を知ることから

### ■加齢を生涯発達と考える学問

崎山みゆきさんが新たな生涯学習として普及しようとしている、聞き慣れない学問「ジェロントロジー」とは。第二次世界大戦後から高齢化社会が始まった欧米諸国では、人の加齢を単なる老化としてでなく生涯発達としてとらえ、最後まで社会との繋がりを持ちながら充実した人生を送れるよう、医学、工学、社会学、心理学、芸術など様々な分野から研究がされてきた。たとえばアメリカでは博士9、修士44、学士30以上の課程でこの分野の学位が認定されている。

日本では「加齢学」「老年学」などと訳されているが、医療、介護の分野以外での研究はほとんどされてこなかった。ところが急速な少子高齢化により、日本は世界に例のない超高齢社会を迎えている。日本人の多くは自分が歳をとったことを嘆き、高齢社会という言葉自体も負のイメージで語られがちだ。

### ■若い人こそジェロントロジーを学んでほしい

生涯学習開発財団理事長・松田妙子は常々、個人に対しては「常に社会との扉を開けておくこと」を、行政や企業に対しては「高齢者を活用すること」を訴えてきた。大いに共感と呼んでいるものの、社会の実態は高齢化に追いついていない。その一因として、理念は分かるが具体策が分からない、つまり専門的な研究がされていない、あるいは海外の研究事例が導入されていないことも挙げられるのではないだろうか。

崎山さんは、日本が高齢社会の先進モデルとして成功するためにも、若い人こそジェロントロジーを学ぶ

東京足立区の生涯学習ボランティア組織にてジェロントロジーの意義を講義する崎山さん。生涯学習の新たなコンテンツとしても期待されている。



学術博士。株式会社自分楽 代表取締役のほか静岡大学大学院客員教授も務める。2000年～2002年に桜美林大学大学院にて生涯学習を専攻。「松田妙子理事長の講義もあり、その考え方に共感しました。1年後、自分楽を設立した際、日本語の社名を付けたことをほめていただき嬉しかったです」とのこと。

必要があると訴える。2003年に設立した株式会社自分楽では、企業が高齢者活用を進めるためのセミナーやコンサルティングを多く担当してきた。その中で分かったことは、若い人が高齢者のことをよく分かっていないという点だった。

どんなにやる気のある人でも、視力、聴力、反射神経などは若いころと同じとはいかない。スマートフォンやタブレット端末を高齢者がスムーズに使えないのは、手が乾燥していて画面が反応しにくいという理由もある。一方、幅広い知識や判断力、誠実さといった点では高齢者は優れている。若者以上に意欲的な人も少なくない。指示を出す際の声や書類の文字を大きくするなど、職場環境を工夫をした上で、適材適所の配置をすれば期待以上の活躍もある。

### ■学んだ人が教え伝えることが大切

そうした経験もふまえ、社会の様々な立場の人たちにジェロントロジーの視点を持ってもらうことが大切と崎山さんは考える。そのためには、老若男女誰でもが学べる生涯学習としてのジェロントロジーが必要。現在、かつて大学院で学んだ桜美林大学の教授とともに、わかりやすいテキストの制作にも着手している。時代に答え早く拡散するために、法人の立ち上げや資格認定の導入も検討中だ。

そして学んだ人は、次は教える立場となって広く世の中に伝えてほしい。また、教えることを生きがいとし、社会の役に立つことを喜びとして感じてもらいたいと願っている。